

国民国家と文学

——北米・南米と改造社の『現代日本文学全集』——

エドワード マック
Edward MACK

この発表では、昭和初期に起こった円本合戦の最初に出版された、しかも代表的な全集、『現代日本文学全集』を扱います。ご存知の通り、改造社によって1926年から31年までに出版されたものです。Manufacturing Modern Japanese Literature: Publishing, Prizes, and the Ascription of Literary Value (Duke University Press, 2010) では、この全集が多様な読者共同体に与えた影響を様々な角度から考察しました。論旨を簡単に申しますと、全集が、ある一定の決まったテキスト群を読者共同体に流布させただけでなく、その共同体内外に、いわゆる「純文学」から成り立つ「近代日本文学」という概念自体をも普及させて、その概念が作品の受容、普及、そして保持に影響を与えたということです。

今回の発表では、拙著を書き終えた後に発見した三つの新しい資料を紹介したいと思います。そして、「カタチ」になっている「日本文学」についての考察で発表を締めくくりたいと思います。

円本ブームの定説によると、正規の予約期間が1931年末に終わった後、改造社とその他の出版社が残本を古本屋に安く売ったので、その本が再び全国の中古本市場に出回りました。そして国内の需要がなくなってから、日本の植民地にも流れたということです。

最初の資料は、慶應義塾図書館に所蔵されている夏目漱石宛の印税領収書です。その一つは、夏目漱石夫人の鏡子が受け取った84円の領収書で、「現代日本文学全集夏目集特製版の500部」のためのものです。特製版の定価は1円

40 銭でしたので、印税率は 12 パーセントで、円本にしては高いほうです。こういう領収書は何枚もまだ現存しているので、この『漱石集』は例外としての増版ではなく、定期的なものと思われます。ここまではあまり不思議に見えないかもしれませんが、上記の領収書は昭和 17 年、すなわち 1942 年に書かれたものです。

予約出版法によると、一旦申し込み金をもらった後は全集物を最後まで出版することが出版社に義務付けられていました。予約期間外に販売してはいけないということはないでしょうが、出版権を漱石全集刊行会と契約した時にその期間を決めたはずで、疑問が残ります。『漱石集』が予約出版という形で、現代日本文学全集の制度で販売されたのは昭和 2 年 6 月でした。この印税領収証の 500 部はその 15 年後で、全集全体の増版の一部ではなかったと思われます。というのは、改造社は揃いの「近代日本文学」を売ろうとしたのかもしれませんが、結局読者はそれに完全に縛られていた訳ではありませんでした。『漱石集』に対しての需要は、全集全体に対する需要を超えていました。そして出版資本はその需要に応じていたらしいのです。

1926 年には日本語の読者は日本列島に限られていませんでした。大日本帝国は言うまでもありませんが、西半球はどうでしょうか。改造社の社員が『現代日本文学全集』を売る為に、ハワイに派遣されたことは知られていますが、当時の一番大きい移住先のブラジルについてはどこにも書かれていません。

ご存じの通り、日本からの移住者が 1908 年からブラジルに渡り始めて、1930 年までに 10 万人を超え、第二次世界大戦が始まったころその人口が 20 万人弱になっていました。遠藤常八郎は 1913 年に来伯して、1920 年に雑貨屋の「遠藤商店」を開店しました。書物関係の販売がどんどん多くなったため、1932 年に店の名前を「遠藤商店」から「遠藤書店」にしました。比較的大きな店でした。

戦前のブラジルには日本語の書物が多かったことは確かですが、驚いたことに『現代日本文学全集』の痕跡はあまり見られません。とは言うものの、ない

わけではありません。戦前のブラジルで出版された日本語の新聞に、本屋の広告があり、その中に『現代日本文学全集』が少なくとも3回現れています。

1回目は1933年の後半です。広告のはじめには『現代日本文学全集』も、春陽堂の『明治大正文学全集』もあります。ここで一つの説明できない謎を紹介しておきます。この広告には両方共「新装」と書いてあるのです。改造社と春陽堂からの正式な「新装版」はあるはずはありません。そして、この在庫はたぶん東京にある古本屋が残本で安く買って、植民地などで捌いた本だと思われるので、本を新装した（つまり、製本し直した）はずはありません。13 mil réis という値段は単行本にしては安いほうでした。価格の比較は難しいですが、参考のために1924年の記事を見ると、卵は1ダース2.6 mil réis にて販売されていました。また、この広告に出ている在庫は全集全体ではなく、6巻分だけでした。^①

2回目の広告は半年後の1934年前半で、再び『現代日本文学全集』と『明治大正文学全集』も現れます。今回は値段が5mil réis になっています。2ダースの卵より安い値段です。今回の『現代日本文学全集』の在庫は9巻分で、1巻分だけが前回と同じです。^②

3回目の広告はその一年後で、1935年前半です。その時は10巻分が掲載されています。前の広告のどちらにも出ていないタイトルは1巻分だけです。^③やはり在庫の部数はわかりませんが、一部だけではなかったと思われます。というのは、同じ1935年度に雑誌『キング』が1ヶ月で3500部輸入されたので、書物に対する市場が十分にあったと考えられるからです。そして、前の広告に出た9巻分は一部も売れなかったため、値段を下げて、また掲載したのでしょうか。しかし、もし一部だけだとしたら、それも面白いことになります。その場合、これは経済的に有利ではない商品ですが、一種の飾りとして掲載しているということになります。

正規の予約期間中に、最初から最後まで購読した人がブラジルには少なかったと推測されます。残本として他の植民地に流れ始めたころ、やっと円本全集

が遠藤書店の広告に現れます。ところが、全集全体として現れるわけではなく、在庫は全部で15巻分だけだったようです。南米の日本語書物販売業は、事実上買い切り制になっていた商売なので、遠藤書店は自分の客が興味を持ちそうなタイトルだけを仕入れていたのかもしれませんが。こういう場合にも読者兼消費者が全集の枠組みに縛られていなかったということになります。

最後に北米のシアトルについてお話ししておきたいと思います。こういう円本全集物はまだ山ほどシアトルに残っています。例えば『日本大衆文学全集』のうち23冊、『世界文学全集』のうち27冊、『現代日本文学全集』のうち123冊、そして『明治大正文学全集』のうち147冊がシアトル日本語学校とワシントン大学の蔵書にあります。その中に、その本の所有者の分かるものもあります。サンプルはあまりにも小さくて気をつけなければなりませんが、例としてその持ち主を紹介します。

当然のことですが、そのうちの数人は経済的に余裕のある人たちでした。ホテル業界で成功した日系人のヘンリー・タケミツ・クボタ氏はその一人です。窪田氏は1923年にシアトルに渡った方でした。はじめのころは肉体労働をしましたが、1930年にホテル業に入りました。そして10年後の1940年、シアトル・ホテルを買って、シアトルで初めての土地付きのホテル所有者になります。

図1は『現代日本文学全集』の第19巻『国木田独歩集』で、外箱に印刷されているように1927年6月に配本されました。窪田氏がようやく経済的な余裕ができたのは早くても1933年頃だったと思われます。従って、正式の予約期間中に購読したはずはありません。窪田氏がいつ手に入れたかは不明ですが、箱の右下の「Made in Japan」というスタンプから、これは1921年—41年の間、商品として輸入されたものとわかります。

輸入していたのは、1912年に設立された大正堂でした。「各種全集北米一手代理店」だったそうです。少なくとも大正堂の輸送ラベル自体は、そのようにうたっています（図2）。こうした郵送ラベルの付いている外箱から、合わせ

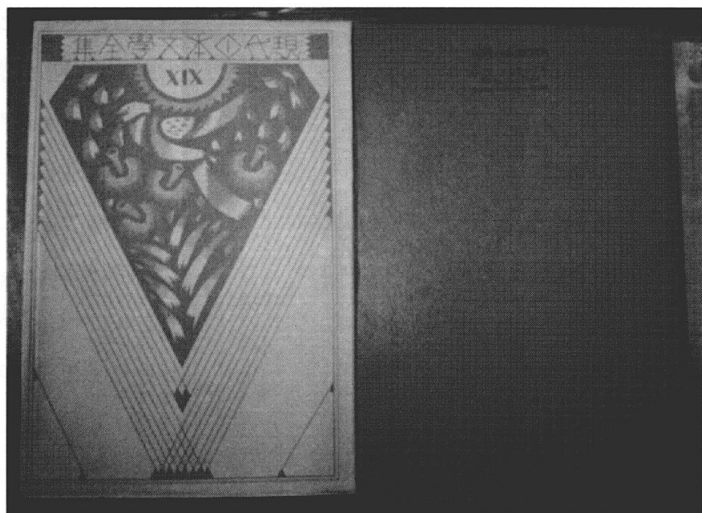


図 1

て5名の購読者がわかります。

図2の原誠一氏も窪田氏と同様に、経済的に余裕のある方でした。1905年に移住し、1919年からタコマ・ホテルの共同営業者になりました。原氏とクボタ氏は知られた人物で、その経歴が調べやすいのですが、そのほかの方々は著名ではない方々で、その経歴を色々な公文書（国勢調査、乗客名簿、収容名簿、シアトル市名鑑など）から再現してみました。

T氏は原氏ほど経済的に恵まれてはいなかったかもしれませんが、労働者階級ではありませんでした。彼は1906年に移住し、はじめの頃、シアトル正金銀行に勤めたことがあるそうです。その後、太平洋印刷に勤め、1927年の名鑑によると経営者でしたが、1929年から共同所有者になっていました。ちなみに、日本でも印刷業界に携わっている全集購読者は多かったそうです。

当時中央公論の編集者だった木佐木勝の『木佐木日記』の中で、この円本全集の読者で一番多いのは「三、四十歳の中堅サラリーマン」だったと書いてありますが、シアトルでは労働者階級も購読していました。

K・S氏は1908年に移住し、1917年にバーテンダーとして働いていました

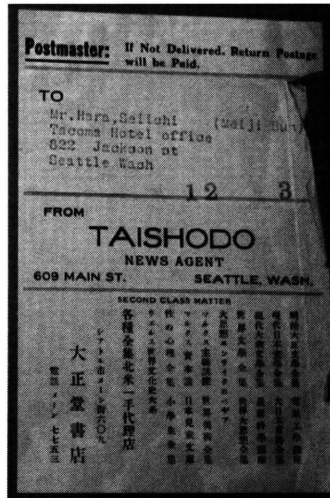


図 2

が、その後シアトルの有名なレーニア・クラブのベル・ホップになっていました。たいした仕事には見えないかもしれませんが、当時の移住者にとっては比較的安定していて、給料のいい仕事だったと思います。

K・S氏宛てのラベルは20枚もあり、全て春陽堂の『明治大衆文学全集』です。第1巻も第58巻もラベル付きの函もあるので、もしかしたらK・S氏が最初から最後まで購読したのかもしれませんが。そのラベル付きの本の配本日付とその配達先を比べると、K・S氏の当時の住所にぴったり合っています。このラベルのお陰で、窪田氏の場合と違って、正規の予約期間内に買われたということがわかります。

K・S氏より社会階級の低い購読者もありました。K・Y氏は1923年にシアトルに移住し、日系人の収容所に収容された1942年には独身で、職業はウェイターだったそうです。T氏は1915年に移住し、1917年には独身でタコマの農業労働者として働いていたようです。タコマ市は永井荷風の住んでいた町で、シアトルから50キロぐらい離れているところにあります。シアトルには住んでいなかったから、ラベルに書いているように同市在住の「C氏」宛に送って

もらったのかもしれませんが。

この読者達にとって、「現代日本文学」というのはいったいどういうことだったのでしょうか。

その一例として、『現代日本文学全集』が出版された当時の読者ではなく、四十年も経ってからの読者、水村美苗を挙げることができます。『私小説 from left to right』（新潮社、1995年）で自分の米国滞在の経験を語っている水村が、その影響を描いています。水村の母は娘の教育のために、改造社の『現代日本文学全集』をアメリカに持って行きました。下記はこの小説からの引用です。

「私は古びた朱色の背表紙を目に浮かべて心を奮い立たせた。本を開くと埃のような黴のようなものが鼻先に舞い上がった。古い布と紙の匂いがある。その奥にある。本棚から本を取り出して開くだけで、自分がまた生を受ける以前の世界へといつのまにか引き込まれるのであった。あの朱色の背表紙の本は母が生まれて間もないころに出版された、日本ではじめての日本近代文学の全集だという。母が何かの拍子に思い立ち、「横浜のおじいちゃん」にねだって、アメリカで育つ娘のためにと日本を去る前にもらってきたのである。」(p. 99)

「黴の匂いの舞い立つ日本近代文学全集に親しむうちに、私はいつのまにか、日本を恋うだけではなく、私自身生を受ける前の日本を恋うようになってしまっていたのだった。」(p. 110)

この引用の中の「日本」は抽象的なテキストからではなく、具体的な、黴の匂いがする書物から出て来たことでした。『漱石集』だけを購入する人達のように、読者は必ずしもその枠組みを完全に内面化するわけではありませんが、それでも影響を受けないはずはないでしょう。その全集の中に少女の水村が見つけたものは「生まれる前の日本」でした。つまり幻想としてのネーションです。

今日の例として使った読者はみな海外に移住し、全然違う背景の中で「日本文学」を読んだ人ですが、日本列島で読んだ読者とそれほど変わるものでしょうか。違いがあるとすれば、それはそのディスカールの魅惑にあるかもしれません。極端な例かもしれませんが、水村は本当にその枠組みに取りつかれているようです。『私小説 from left to right』の正式なタイトルが『私小説：from left to right 日本近代文学』であるように、今でもその「日本文学」という概念と取り組んでいます。

ここでいっている「日本文学」はやはり存在論的な事実ではなく、歴史の中のディスカールとしての「日本文学」です。一般読者にとっては、読む時に日本語で書かれた作品がごく限られている状況の中だけで「日本文学」になると言えましょう。その一つは今日のような研究集会で、広く言えば教育制度の中でそういうディスカールに吸収されます。もう一つは『現代日本文学全集』のようなカタチになってからです。

皆様はこの研究集会の題「書物としての可能性：日本文学がカタチになるまで」をどう解釈しているのでしょうか、本当に教えて頂きたいと思います。もしかしたら、この副題は「日本文学」というナショナル・リテラチャーの概念あるいは制度ができた時点まで、歴史的に解釈しているかもしれません。ですが、そういうふうに解釈すると、「書物」という言葉が単なる「書かれたもの」という意味になるかもしれません。ところが、近代文学という立場から見ると、「日本文学」というディスカールは早い内からすでにあったものです。水村さんの『日本語の亡びるとき』によると、そのディスカールができたからこそ、日本近代文学が可能になりました。

そうすると、題のもう一つの意味が現れてくると思います。「日本文学がカタチになる」時は歴史の中の一点ではなく、過程の中の一段階なのかもしれません。あるいは納得していただけないかもしれませんが、流通しない原稿などはナショナル・リテラチャーどころか「書物」にはなり得ないと思います。社会現象としての「文学」になるためには、作品が読者に届かなければなりません。

ん。ですから近代では「文学」になっている書物はほとんどが出版物です。こうした観点からタイトルをみると、カタチにはまだなっていない、言い換えれば出版されていない「文学」はありえないのであって、一般読者にとっては「書物」になってから、はじめて「日本文学」になる可能性があるということになります。しかし、「日本文学」になる可能性があっても、その必然性はあるでしょうか。

【注】

- ①第11巻『正岡子規集』、第25巻『志賀直哉集』、第27巻『有島武郎集・有島生馬集』、第29巻『里見弴集・佐藤春夫集』、第31巻『菊池寛集』、第43巻『岡本綺堂集・長田幹彦集』。
- ②第2巻『坪内逍遙集』、第7巻『廣津柳浪集・川上眉山集・斎藤緑雨集』、第26巻『武者小路實篤集』、第32巻『近松秋江集・久米正雄集』、第42巻『鈴木三重吉集・森田草平集』、第43巻『岡本綺堂集・長田幹彦集』、第44巻『久保田万太郎集・長與善郎集・室生犀星集』、第55巻『小栗風葉集・柳川春葉集・佐藤紅緑集』、第62巻『プロレタリア文学集』。
- ③第2巻『坪内逍遙集』、第7巻『廣津柳浪集・川上眉山集・斎藤緑雨集』、第26巻『武者小路實篤集』、第32巻『近松秋江集・久米正雄集』、第42巻『鈴木三重吉集・森田草平集』、第43巻『岡本綺堂集・長田幹彦集』、第44巻『久保田万太郎集・長與善郎集・室生犀星集』、第50巻『新興文学集』、第55巻『小栗風葉集・柳川春葉集・佐藤紅緑集』、第62巻『プロレタリア文学集』。

* 討議要旨

中川成美氏は、『現代日本文学全集』に影響を受けた例として、水村美苗を挙げた理由を問い、発表者は、「日本文学」という概念を非常に意識的に採り上げている作家であるゆえと応答した。斎藤桂氏からの、今後研究者は「日本文学」にどのように関わっていくべきであるのか、という質問に対し、まだ「日本文学」というのは形になってはいない、なりつつある状態だ、という考えもある。「国民国家」という枠組みの中で見るとは限らないが、それが唯一の見方ではないと常に意識して用いるべきであり、さらには、「国民国家」「民族」「国家」という枠組みの必然性も薄くなるかもしれない、と答えた。谷川恵一氏は、①大正堂のラベルは本屋が貼付して発送したために残存したのか、②現存する日本書籍は、どのような経緯で在外図書館に所蔵されたのかと質問した。発表者は、①ラベル自体は当時のアメリカの輸送制度に適うものとして製作されているが、郵送スタンプが捺されていないため、どういった経緯で残存したのか定かでないかと答え、②今回採り上げた資料は、日本語学校に寄贈されたものであり、たいいては、世代を経るごとに書籍の内容が理解できなくなったために寄付されたと考えられるが、他にも、太平洋戦争中に、敵性言語ということで預けられた物が個人宅に残っている可能性があるかと補足した。メラニー・トレーデ氏は、全集という形はいつから採用されているのかと問い、発表者は19世紀終盤ではないかと応答した。